

しかし、今日でも文字によらないことばのわざを生み出す社会が世界各地に存しており、そうした研究も積み重ねられてきた。我々はそのわざの仕組みや生態をこうした社会から学び、日本古代の文字を通して見出されることばのわざの世界において共通する点を求めてゆくならば、この分野の研究を切り開いてゆくことができるのではないか。

その際、声の世界についての調査・研究の成果を文字によって読み、単にそれを利用するというのではなく、自らも大海に漕ぎ出して声々を聞き、その生態をよく観察して生成・流動の法則を求めてゆくことであろう。また、こうした分野の研究者たちとの共同研究という方法もあろう。声の世界は複雑にして深い。その研究成果を読むだけでは、その生態に届かないことが

小特集・古代文学研究の現状と展望

仏教説話研究からの跳躍

『日本霊異記』をめぐって—— 三品 泰子

『日本霊異記』は、日本における仏教説話集の嚆矢とされ、先行する中国の仏教説話集や日本の後世の説話集との間の書承関係が指摘されてきた。その一方で、『霊異記』がどのような同時代言説との関係性のなかに息づいていたのかは、まだよく見えていない。同時代言説との関わりにおいて、「仏教説話集」とは別の、なんらかのネットワークの中で『霊異記』を捉えることはできないだろうか。

例えば『霊異記』は、各説話の冒頭で年月日を明記し、時代

多い。

この大海に舟を出そうとする場合にも留意せねばならないことがある。わざあることばは一地域に孤立して存するのでなく、多くは他地域から伝播してきたものだ。また、ことばのわざは他のさまざまなことばと関わってはたらくのであり、そうした生態をこそよく観察しなければならない。だから、たとえば歌なら歌のみを調査・研究するのでなく、声の世界のことばのわざ全体を知る必要がある。

古代の豊かなことばの世界にたどり着くため、困難で迂遠な道ではあるが、こうした総合的・共同的な研究を今後さらに推し進めてゆくことではないか。

順に説話を配列した、一種の年代記である。この点に注目すると、津田博幸氏「歴史叙述とシャーマニズム」『日本書紀』を中心に——（『日本文学』一九九・五）、「和歌とシャーマニズム」『日本書紀』をめぐって——（『国文学』二〇〇〇・四）が論じる歴史叙述の問題とも重なる。

津田氏は、『日本書紀』の歴史叙述の問題として、聖徳太子の段階で知の境位が上がり、それ以前と以後とでは、未来を読み解く知の緻密さや回路の多さが違うということを指摘する。

この視点は、時代順に説話が配列されている『靈異記』においても有効である。未来を読み解く『靈異記』の知の境位は、上巻から中巻、下巻へと進むにつれて、因果から表相へと進展しているのではないか。

津田氏の研究において、未来を読み解く知という問題は、意味化ゼロの地平を抱えつつ意味化していくという言語哲学の問題も抱えている。この点で、和歌を対象とする猪股ときわ氏の最近の研究（『歌の王と風流の宮―万葉の表現空間―』III歌という言語フィールド第一章―第四章 森話社、二〇〇〇・一〇）ともシンクロする。

猪股氏は、『万葉集』巻十六や大伴家持歌や「歌経標式」などに見られる和歌の言語観を、「和歌曼荼羅」・「言語フィールド」と呼ぶ。和歌の定型の中で、和語や漢語や仏教語など、異なる出自をもつ言葉どうしが並ぶことで、それぞれがもとの出自から離れた新種のものになっていく。そのプロセスの場が

小特集・古代文学研究の現状と展望

2001年の古代文学研究

九十年代の古代文学の研究シーンに登場した「現場論」なるものが、古代文学会の、それも夏季セミナーというきわめて限定された場所が発信源であったことは、たしかである。ましてや、その研究史的意義などは、いまだ未知数といわざるをえない。その意味では、「現場論」は、現在進行形の、一つのプロ

「言語フィールド」であり、変化していくときのアナロジの論理を「曼荼羅」と呼んでいる。

こうした八〜九世紀に見られる言葉への知に注目することは、これからの『靈異記』研究においても重要である。例えば、『靈異記』の各説話の末尾では、いろいろなジャンルの仏典や外典の文句が引用され、説話がその引用された書物の例証話として位置付けられている。これなども「言語フィールド」の問題として考えられるだろう。また、仏教説話集たろうとして説話を書き、並べることが、言葉を紹介して縁起や因果に巻き込まれていくことである。そのとき「曼荼羅」というアナロジの論理の場が、『靈異記』のなかにも、和歌世界とはまた違った貌のもとに現れてくるのではないかと思われる。

以上、『日本靈異記』を史書や後期万葉・歌論など同時代の言説との関わりから見ること、仏教説話研究の枠を広げてみるという方向性を提起してみた。

斎藤 英喜

セスを、今も生きているといってもよい。

その過程における一つの成果、論文集『祭儀と言説』（森話社刊）の巻頭に置かれた津田博幸の熱く語る言葉を聞こう。

一九九〇年代の始め、「表現論」としての「発生論」の様